

2025年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

神輿から始まる協力の輪
～本物みたいな神輿が作りたい～



社会福祉法人檸檬会 レイモンド茅ヶ崎保育園

目次

1 はじめに.....	1
2 課題について.....	1
3 なぜ取り組むことにしたのか.....	1
4 科学する心を育むとは.....	2
5 事例.....	2
事例①「神輿との出会いから神輿作りへ」.....	3
事例②「えっ？かつぐ人がいなくなっちゃうの？第1回めろん会議」.....	4
事例③「かたくて、軽くて、丈夫な箱ってあるかな？」.....	5
事例④「どの段ボールが神輿作りにいいの？」.....	5、6
事例⑤「グループをきめたら？第2回めろん会議」.....	7
事例⑥「材料を集めるための看板と箱をつくろう」.....	7
事例⑦「係の仕事…お神輿の設計図をかくよ」.....	8
事例⑧「すごい！つよくて大きい段ボール箱が届いたよ」.....	9
事例⑨「誰か手伝って！」.....	9
事例⑩「やったあ！できた…」.....	10
事例⑪「みんなに見せたい！」.....	10
6 まとめ.....	11
7 事例でみえた課題と今後の方向性.....	13

1. はじめに

本園は、3歳児～5歳児クラスの異年齢合同保育を行っている。同じ遊びでも年齢によって遊びに使う玩具、用具、表現の方法、遊びの展開に違いがあり、刺激を受け合いながら育ち合う姿がある。

相談相手として保育者の見守りが常にあること、素材や生活に必要な用具がいつでも使えるようにしていること、素材を豊富にするために、保護者の方にも協力をしていただいている。

様々な出会いや体験から飛び出す子どもたちの言葉や気づき、発見や不思議さについて、子どもたちが考えたことをいろいろなカタチで表現できる場として、サークルタイムを午前、午後に行い、そこから対話を繰り返し、深掘りしていくことを大切にしている。

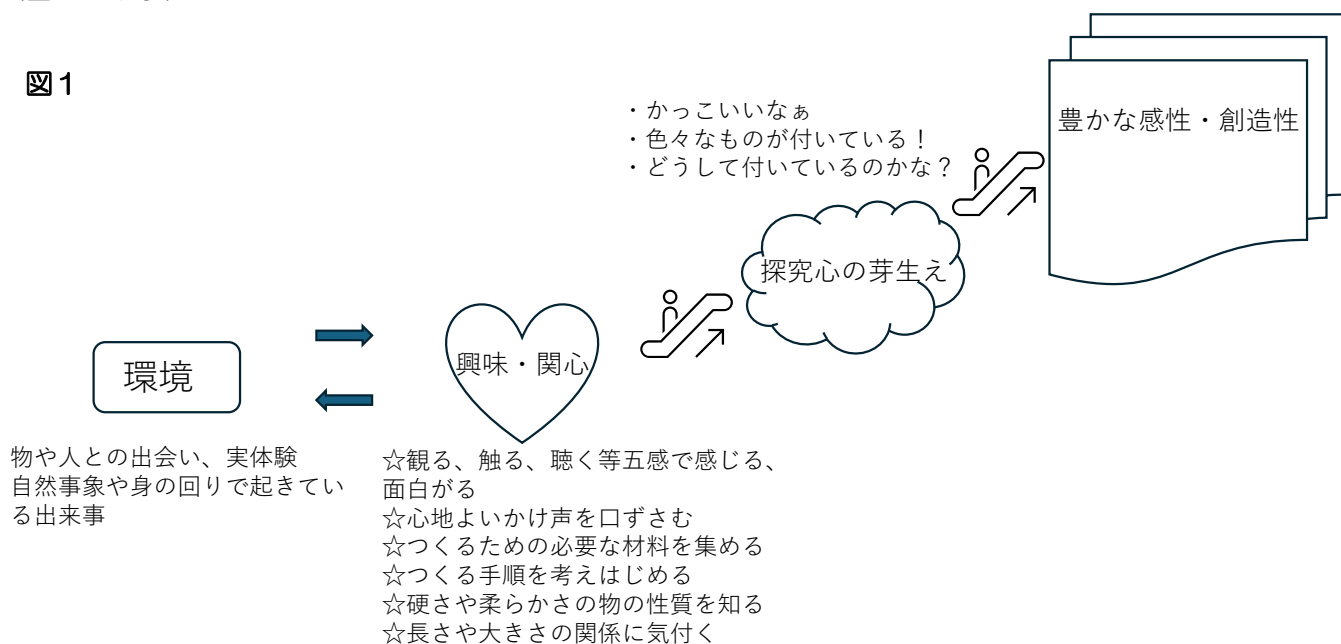
2. 課題

子どもたちが自分で想像したものについて発言したり、自分なりに表現しようとする感性や創造性の芽生えをもっと伸ばしたい。

3. なぜ取り組むことにしたのか？

2025年度から子どもの感性や創造性を育むためには、表現のあり方について考え直し、どうしたら想像力が豊かになり、イメージしたことを創り出そうとする力を育めるのか、保育者間で話し合ってきた。(図1に示す)

図1



課題から、『豊かな感性や創造性が芽生えるって、子どもたちのどんな時？』について対話を繰り返し『興味・関心から始まる子どもの心が動く時なのではないか』となった。

“心が動く時”とはどんな時か、以下に示す。

～心が動く時～

- ◇ 子どもたちが身の回りで起きている出来事に「なにこれ？」「どうなってるの？」「ふしぎ！」と驚いたり、感動した時
- ◇ 自然の不思議さや面白さを発見し、「すごい！」「おもしろい！」「きれい！」と興味が膨らんでいる時

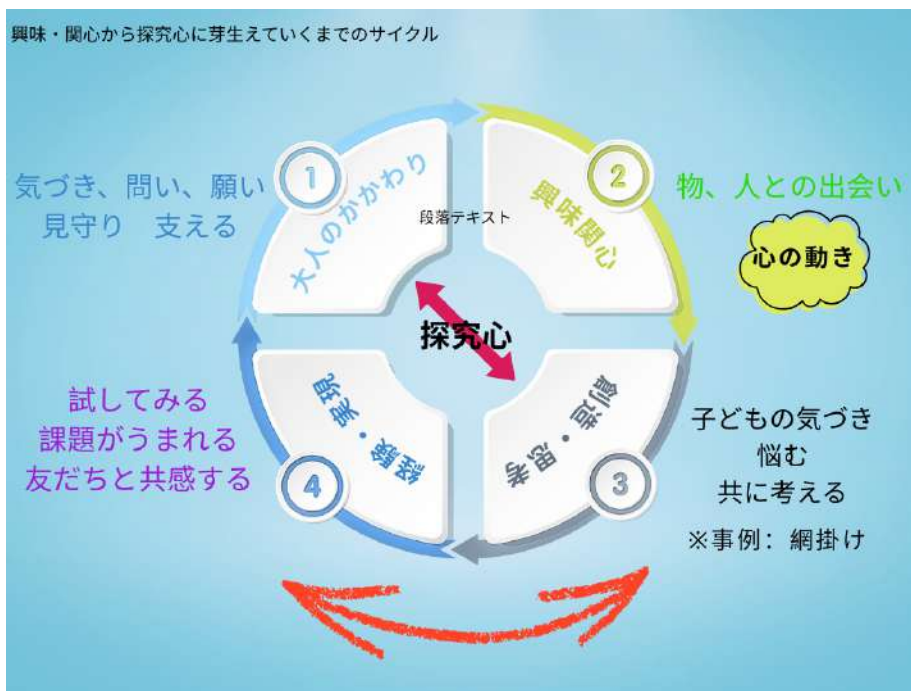
- ◇ 豊富な素材に出会い、「触ってみたい」「使ってみたい」とワクワクしている時
- ◇ 友だちと一緒に遊ぶ楽しさ、力を合せることを知り、楽しい、嬉しいと感じた時
- ◇ 子どもたちがくらしの中で、様々な人々と出会ったり、体験したことを通して、人に優しくされたりしようとする思いやりや、教えてもらったり助けてもらったりした喜びの時
- ◇ 自分で考えたことがうまくいった時、わからなかったことがわかった時

4. 私たちが考える子どもの『科学する心』とは、上記のような “ 心の動き ” から始まる “ 探究心 ” と考え、以下のような心の状態とした。

- ① 子どもたちは観る、聞く、触るなど五感を使って体感しながら興味・関心が湧く心
- ② 「カッコいい」「自分もやってみたい」「できそう！」の憧れの心。もっと知りたいと思い始める心
- ③ 子どもたちの興味・関心が湧き出た対象に関することについて近づこうとする探究する心
- ④ 物事について不思議に思ったり、自ら考えたり、言葉にしたり、作ってカタチにしたりして表現し、遊び込む心
- ⑤ 一人ではできないことを体験し、他者と思いを伝え合いながら力を合せて一緒に成し遂げようとする心
- ⑥ 友だちと一緒に力を合せたり、助け合ったりして喜びや楽しさ、面白さを知る心
- ⑦ うまくいかない体験も積み重ねて、試行錯誤しながら更に探究していこうとする心
- ⑧ 自分がイメージしたものがカタチになった時の達成感

『科学する心を育む』とは、これらの心を大切に汲み取りながら、子どもたちが様々な感性を安心して出し、発揮できること、そして心が動いていく中で何度も考え調べ、意見を出し合って互いに認め合うこと、そして試行錯誤しながら創造したものをカタチに表すことができるまで、図2のようなサイクルで①と②、①と③、③と④を行ったりきたりしながら、探究が深まっていくことなのではないかと考えた。

図2



研究内容

今回は、5 歳児クラス 8 名を対象に、

- ① 子どもの心の動きから探究心が芽生えていくプロセスを考察する。
- ② 個の興味・関心が深まっていくところから、集団で行動する共同活動を通した子どもたちの気持ちの変化と行動について探る。

以上の2つの研究について、令和7年度6月から7月までの実践事例を示す。

事例① 6月12日 「神輿との出会いと神輿作り」



地域交流で行っている神輿職人「神輿康」の中里さんに来園していただき、神輿担ぎに参加することが今年で3回目になる。神輿に興味湧き、子どもたちは自らどんどん触れていた。様々な装飾について疑問を持ち始め、担ぎ手の大人に質問したり、子どもたち同士で意見を出し合ったりする姿が見られた。

大人の力を借りつつ、実際に担いでみることを経験した。その日の午後、b 保育者が今日の気持ちを色で聞いてみると、黄色や緑色の子が多かった。「それはどうして?」と質問を重ねると(注)、

A 児は「お神輿が楽しかったから!」と答えた。その話を聞いていた B 児 D 児が「どっこい、どっこい」と言いながら動き出した。b 保育者がさりげなく長い棒を出すと自然と肩にのせ4, 5人が集まり神輿ごっこが始まり園内を繰り返して回っていた。

H 児 を筆頭に、B 児 D 児 たちは「神輿作りたい!」と言い出した。だが材料が揃っていないことに気が付き、何で作るか話し合いが始まった。

D 児「段ボールで作ったらいいんじゃないか!」と提案した。段ボールを準備するとD 児 B 児 H 児 はアイデアを出し合いながら、神輿作りをすすめた。D 児は壁に貼ってあったお神輿の写真を持ってきて、写真をよく観察し、「鈴はどうやって作ったらいいだろう?」とつぶやいた後、作る方法を提案していた。

D 児 B 児 H 児 の3名と4歳児の1児は、自分たちなりに工夫をしながら作り進め、B 児 D 児 は、集中が続き最後までやり遂げ完成させた。そして神輿担ぎが始まった。

しかし担ぐたびに装飾が取れてしまい、その度に直していた。初めはセロハンテープで試し、取れてしまうとOPPテープに替え、それでも取れてしまうと布テープなど、様々なテープで試して、より頑丈に出来るよう考えながら行っていた。

降園時間まで続いた神輿遊びは、翌日も同じメンバーで続き、壊れた箇所を直しては、担ぎ遊びを繰り返して楽しんでいた。

注) 自分の気持ちを伝える時や相手の気持ちがわかりやすくするために、気持ちを色で表す取り組みをしている。(黄色は楽しい気持ち、緑色は嬉しい気持ち 対象は3 歳児クラス~5 歳児クラス)

※水色枠: 大人のかかわり、緑枠: 興味関心、網掛け: 想像・思考、紫: 経験・実現を表しており

[6 まとめ] の図と関連している。

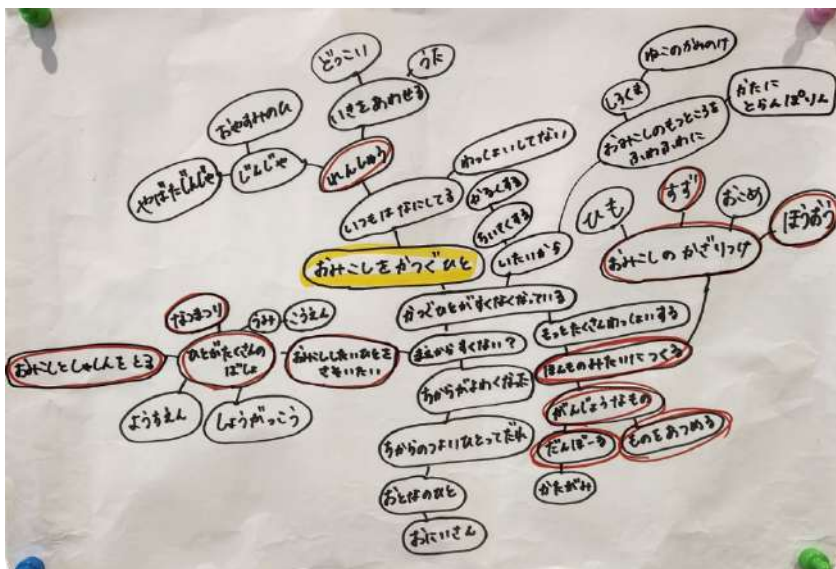


事例② 「えっ? かつぐ人がいなくなっちゃうの? 第1 回めろん会議」

6月16日、神輿づくりに興味を示している姿を見て、子どもたちと「めろん会議」を行った。a 保育者「神輿の担ぎ手が減ってきているみたいなんだけど、増やす為にはどうしたらいいと思う？」と問いかけた。沢山の発言があった中で「いろんな人の前でわっしょいしよう！」という意見が出てきた。それを聞いたA児B児「お神輿がないとわっしょいできないよ」という発言があり、めろん組でお神輿作りをすることに決定した。

B児、D児、H児の神輿への熱意が続き、保育室に掲示してあった写真を見ながら自分のスケッチブックに絵を描いて「赤いのは提灯っていうんだよ」「上に乗っている鳥は鳳凰だよ」と自分の知っていることを伝え合ったり、相手の話を聞いて「そうなんだ」と話し合う姿が見られたりワクワクしている様子だった。

※水色枠：大人のかかわり、緑枠：興味関心、網掛け：想像・思考、紫：経験・実現を表しており
[6 まとめ]の図と相関している。



事例③ 「かたくて、軽くて、丈夫な箱ってあるかな」

6月19日、神輿を作り始めるためにはどんな素材や物が必要か「おみこし会議」を行った。a 保育者が「素材ってどんなものがある？」と問いかけると、保育園で使用している「空き箱、厚紙、画用紙、段ボール」と様々な意見があがった。その中でB児が「ランドセルが届いたんだけど、その段ボールが特大で、それが使えるかもしれない」と話をした。すると、H児から「それでも本物のお神輿にするためには 小さいかもよ」と話があり、a 保育者が「大きい段ボールが欲しい時どうする？」と問いかけると、考え



が 思いつかずにいた。続けて a 保育者は「お花のことに詳しいのは何屋さん？」と問いかけると “ お花屋さん ” と声を揃えて言った。

a 保育者「じゃあ段ボールに詳しいのは誰だろう？」と問いかけてみると、D 児 から「段ボール屋さんかな？」と言い、それを聞いた H 児 が「でも段ボール屋さんって聞いたことないよ。調べないと。」と言った。そこで iPad で検索することにした B 児 D 児 H 児 は「ちがさき だんぼーるやさん」とひらがなを入力して検索し「糺ミヤザワ」を見つけることができた。

神輿作りをするには大きな段ボールが必要だ！とわかった子どもたちは、段ボールを手に入れたいため、自分たちで電話を掛けたいということになり、何てお願いをしたらよいか話し合いを始めた。

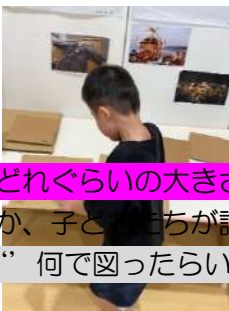
保育者の支え：子どもたちが電話をする前に、a 保育者は子どもが iPad で見つけた段ボール屋に事前に電話をかけ、神輿づくりのために丈夫な段ボールがほしいという内容の電話を子どもたちからかけると伝えていた。



事例④ 「どの段ボールが神輿作りに一番いいの？」

子どもたちが電話をした翌日6月20日、株式会社ミヤザワの社員さんが紙の種類や厚さ等特徴の違う段ボールのサンプルを複数枚持ってきてくれた。するとB児 D児 E児 はそのサンプルを持ってじっくり見つめながら何が違うのか観察を始めた。最初に D児 が色の違いに気付き、B児 は「横から見た時の “ なみなみ ” の形が違うね」に気付いた。a 保育者は、「ちょっとだけ重さが違いそうな感じがするから同じ高さから落としてみるよ」とやってみせた。E児 は落ちる速さが全く違うことに気付き、重さをはかる機械が 欲しいと提案した。実際にスケールを使って重さの違いを確かめた。重すぎると肩が痛い、軽いと壊れやすいと考察した

B児 D児 E児 は、中くらいの重さの2つの段ボール②と④を詳しく調べてみることにした。「②の重さ66g、叩いてみると（コンコンと手で叩いてみる）音は痛そうな感じ、厚くて2枚になっている。④の重さは47g、軽くて叩くと少し曲がってしまう。1枚で薄いね。」と分かったことを伝え合っていた。最初は “ ②の方が頑丈だから決まりだね ” と3人で話していたが、B児 から「これハサミで切れるのかな」と疑問をつぶやいた。そこで a 保育者は、実際にカッターを渡し、一緒に刃を段ボールに刺してみた。すると子どもの力では全く切れないことがわかり大人の力が必要だということに気が付いた。B児 D児 E児 の3人は、後日神輿会議で「④の段ボールが良いと思った」とみんなに伝え、賛同を得て④の段ボールでお願いすることが決定した。



6月23日、どれぐらいの大きさの段ボールが必要か測り始めた。カプラを並べてみてどのぐらいの大きさにしたいか、子どもたちが話し合いながら進めていた。しかしすぐに崩れてしまい中々理想の大きさにできなかった。“ 何で図ったらいんだろう ” となり、a 保育者が15cm定規を用意し定規で測ってみようと促してみた。

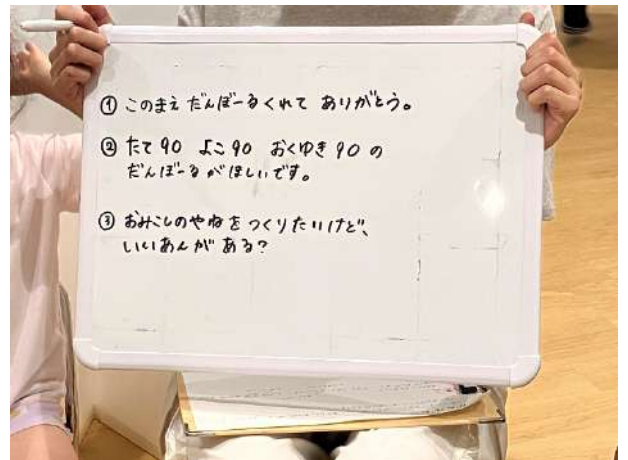
今度は15cm定規では短すぎてしまい、図ることが難しかった。“ やっぱカプラを使ってみよう ” となり、カプラだけでは難しかった経験を活かし、足置きを使い高さや安定感を出して試していた。それでも理想の大きさには届かず、四苦八苦して悩み始めたため、a 保育者は3メートルの巻き尺を渡した。

“ こんなものがあるんだ ” と B児 D児 はワクワクした表情で大きさを測り、やっと理想の大きさにたどりつくことができた。

B児 と D児 は最初は “ 自分たちのクラスの神輿だから自分たちだけでやりたい ” という気持ちが

あるように見えたが、興味を示す年下の子どもたちにも徐々にやり方を教えてあげたり、こっち持っててと手伝いを促すなどリーダーのような役割をし、4歳児クラスの子どもたちは嬉しそうに「次なにする？」と聞きながら協力していた。

大きさが決まり、段ボール屋さんに注文するために、どうやってお願いするかについて考えてから「縦 90 cm、横 90 cm、高さ 90 cmの段ボールをお願いします。」と注文した。



事例⑤ 「グループをきめたら？第2回めろん会議」

保育者の願いとして “ 誰かがやってくれるからではなく、自ら主体的に取り組むことの楽しさを知って欲しい ” 思いがあり、神輿のパーツ毎のグループ分けの提案をしてアプローチした。子どもたちは賛成し、“ 屋根 ”、“ 堂 ”、“ 担ぎ棒&鳳凰 ” の3つのグループに分け、それぞれをリーダーとして神輿づくりをしていくことにして、グループごとの話し合いの時間をつくった。

グループ別の話し合いが進む中で、自分の気持ちを表現することが苦手な C児 は、周りの友だちから「どれがやりたい？」と聞かれてもなかなか答えることが出来ずに固まっていた。すると同じチームの E児 が、C児 の様子を見て気にかかけ、E児 なりにどうやったら C児 が意見を表出できるのか考え、保育者が持っていたチーム分け表のひらがなを指さしながら「屋根がいい？堂がいい？それとも鳳凰？」と一つずつ指を差して問いかけていった。その E児 の行動で、C児 は堂を指さし自分の気持ちを表現することができた。それを

見ていた他の子どもたちは、何かを感じたのか、どのチームもみんなの意見を聞きながら、伝わらなかつたらどんな言い換えをしたら伝わるかを試行錯誤しながら伝え合うようになっていた。

H児、B児、F児は屋根グループ、D児、G児、A児は鳳凰、担ぎ棒グループ、E児、C児は堂グループの役割に決まった。

一つの温かい配慮や優しさが周りの雰囲気をよくしてくれるのだと改めて実感できた。

※水色：大人のかかわり、緑：興味関心、太字：想像・思考、青：経験・実現を表しており[6 まとめ（事例でみえた子どもの探究心を表す）の図と相関している。

※黄色：他者を思いやる心 二重下線：保育者の気づき、思い

鳳凰



堂



担ぎ棒

事例⑥「材料を集めるための看板と箱をつくろう」

6月14日、どのような材料が必要か話し合う中で、“担ぎ棒”を作るのに“長い棒”が欲しいという提案が出た。どのような物が材料になるか話し合い、ラップなどの“芯”がいいのではないかなった。a保育者が“芯”はどこにあるのか問いかけると、「キッチンペーパー」という意見が出た。他にあるかどうか問いかけてみたが、子どもたちは思いつかなかった。自分たちだけで“芯”を集めることが難しいことがわかった子どもたちは、「箱回収みたいに、回収箱を作ってみてはどうか」と提案があった。そして、保護者や保育園の関係者に協力を募るため看板と箱を作ることが決まった。箱作りチーム、看板作りチーム、

看板の文章を考えるチームに分かれて会議を行った。この会議では、各グループに保育者が一名ずつ入り会議の糸口を提案したり記録の役割を行った。

【箱グループ】(B児、C児、D児、G児)

b保育者が「どんな大きさにしたい？」と聞くとB児「棚ぐらいの大きさはどう？」と提案した。それ以上の提案はなかったため、b保育者がゴミ箱や着替えを入れるカゴなどを棚の横に並べ、「こんな大きさもあるね」と提案してみた。C児、D児、G児の意見を順番に聞くとゴミ箱ぐらいの大きさにしようかと大きさが決定した。するとG児が「みんなが見るように赤色にするのは？」と見た目の提案が出た。そこから赤色だけにするのか、何で色付けするのかと子どもたちだけで話し合う姿も見られ始めたところで会議はいったん終わり、全体の会議が始まった。



事例⑦ 「係の仕事…お神輿の設計図をかくよ」

それぞれのリーダーが決まり、実際にどんな形にするのかを保育者と各リーダーで話し合いをした。堂づくりのリーダーの E児 C児 と「どんな色にしたいかどんな装飾を付けたいか」と実際のお神輿の写真を見ながら話していると、E児が「ちょっとなんかいいこと思いついたかも」と置いてあったペンを持ち、紙に神輿の全体像を描いていった。設計図が完成したところで、C児 は E児 が描くのを横でじっと見ていたので a 保育者は C児 に「色を決めるお願いしても良いかな？」と問いかけると快く受け入れてくれた。どこを何色にするか E児 と話しながら塗り進めていた。全体を金にしたいという思いは互いに共通していたが装飾の色を何色にするか迷ってしまうと、「色塗り担当は Cちゃん だから決めて良いよ」と譲ってあげる E児 の姿があった。

その様子を見ていた屋根グループリーダーの H児 と B児 は “自分たちもやりたい” と話し、本物の神輿の写真を見ながら屋根の設計図を描き上げていた。B児 がペンを握り、H児 が「ここは三角にした方が本物っぽいと思う」等対話しながら描き進めていた。

事例⑧ 「すごい！つよくて大きい段ボール箱が届いたよ」

6月27日、事例③、事例④で調べ、注文した段ボールを株式会社ミヤザワの社員さんが、耐久度や重さなどいろいろと違う二つの段ボールを持ってきてくれた。持ってきてくれたその後、段ボールについて社員さんが話をしてくれた。子どもたちは、叩いてみたり、嗅いでみたり、入ってみたり、持ち上げてみたりしながら頑丈さを調べていた。叩いたり、音を聞いたり、身体全体を使って大きさを感じたりしていく中で気づいたこと、感じたことをそれぞれ個別に質問していた。思ったことを自分の言葉で伝えられる子、恥ずかしがり屋で質問できない子は保育者を介して質問する子もいた。どの子どもたちも興味や関心深かったことだったようで、思ったことをその場で聞いて納得する姿がみられた。



事例⑨ 「誰か手伝って！」

6/30 神輿の色塗り（装飾づくりと金色での色塗り）

お神輿の飾りを作る係とお神輿にどの色をどこに塗るか決める係に分かれた。塗る場所を決める時にはE児が作成した設計図をもとに実際に塗る段ボールに線を描いて決めた。金色に塗り進めると、匂いに着目したG児は「これなんか、金色のお金の匂いがしてきた」と言う周囲にいた友だちたちも匂いを嗅ぎ始め、「ほんとだ！」「よく気が付いたね！」など共感し合い始めた。塗りが進んでいくと、塗りむらに気が付き始めたD児は「あ！ここ段ボールが見える！」と友だちに声を掛け、「ここ手伝って！」「まだ段ボール見えるよ！」と声を掛け合って協力し合い、完成へ向けて夢中になっていた。絵の具と水を足す際、塗りむらが気になっていたD児は、「水少なくして」とa保育者に声を掛けた。水を少なくした絵の具で塗ってみると、塗り残しがなくなっていく。その様子を見ていたH児B児は「いいじゃん！いいじゃん！」と褒め合う姿があった。

塗り進めていくうちに、H児が「誰か助けて！」という呼びかけに答え、「ここ手伝って！」「まだ段ボール見えるよ！」と声を掛け合い、協力する姿があった。塗るはずではなかった場所に絵の具が着いてしまっても「OK！OK！」「大丈夫だよ！」とポジティブな声掛けをしながら徐々に完成へと近づいていった。

屋根づくりグループでは、リーダーのB児は、F児H児と一緒に屋根づくりが始まった。どんな色にするのか、何を使って黒くするのか手を動かしながら話し合いをしていた。屋根に使う段ボールを黒の布テープで黒くすることが決まると、テープの両端を持って慎重に貼り進めていた。屋根の形にこだわりがあるB児は、「三角の屋根にしたいけれど、四角っぽくなっているな・・・」とつぶやくと、その言葉が聞こえた周囲の友だちが段ボールを支え、形を整え、理想の形に近づけられるように工夫をしていた。

担ぎ棒づくりグループでは、集まったラップやキッチンペーパーなどの芯を使って担ぎ棒づくりを行った。芯を布テープで繋ぎ、神輿よりも長く作るため、長さを確認しながら作り進めていた。目指していた長さにすることが出来、いざ持って見ると「バキッ」と折れてしまった。折れた箇所を布テープで補強しそれでもまた折れてしまった。それ以上、方法が見つからず、悩み続けていた様子を見て、a保育者は、段ボール屋さんが持ってきてくれていた長細い角材の段ボールを見せた。するとB児とD児は、ホッとしたような表情で喜びすぐに神輿の下にその角材を置き、持ち上げた。大成功し、喜び合っていた。



事例⑩ 「やったあ！できた…」

7月18日、全てのパーツの準備が整い、ついに組み立てを行った。以前作っていた設計図を見ながら位



置を確認し、何のテープが良いのか E児 と B児 で話し合いを行い、養生テープで付けようと決まった。製作が得意なG児に「養生テープってどれだっけ？」と聞き、テープ置き場で一緒に探す姿があった。周りにいた友だちに向かって、B児 は率先して声を掛け、「テープを切って渡してくれないかな？テープ貼りたいからこの場所でもってて」等と、みんなで協力してやろうとする姿が見られた。それから四苦八苦しながら担ぎ棒もつけて組み立てが終わった。皆で「わっしょいわっしょい」と声を出しながら担ぎ、一度下ろすと自然と子ども同士がハイタッチやハグをし、ガッツポーズをするなど、友だちと一致団結して作ってきたものが完成した喜びを分かち合っていた。嬉しくて目を潤ませる姿もあった。

事例⑪ 「みんなに見せたい！」

6月13日、“どうやったら担ぐ人を増やすことができるか？”という話し合いの中で、“たくさんの人の前でわっしょいする”“お神輿と写真を撮ってもらおう”という話が出ていた。神輿が完成した後に、もう一度“どうやって見せたいか？”について、サークルタイムをした。H児は「夏祭りで写真コーナーを作ってみんなにお神輿と一緒に撮ってもらいたい」、A児は「自分たちが作った神輿を担いでいるところを、お家の人や段ボール屋さんに見てもらいたい」という提案があった。その提案に他の子どもたちは賛成し、ワクワクした様子で「どっこい、どっこい」と掛け声の練習が始まった。夏祭りの当日、お神輿のフォトスポットを作った。子どもたちはiPadで写真を撮るカメラマンになり、なりきって撮影していた。

ゲストとして、保護者の方、株式会社ミヤザワの社長、社員さん、神輿職人の中里さんを招待し、夏祭りの最後に保育園の前で神輿担ぎを披露した。担ぎ終わったあとは、“肩が痛い、暑い、疲れた”などと話していたが、沢山の拍手を受けて恥ずかしそうにしながらも自信に満ちた顔をしていた。

6 まとめ

◇事例①、④、⑥から「大人のかかわり」「興味関心」「想像・思考」「経験・実現」を抜粋し、子どもたちの探究心から考察し、思考や行動の変遷について図3、4、5に表す。

研究内容 ①子どもの心の動きから探究心が芽生えていくプロセスを考察する（事例①④）

お神輿との出会いから完成まで続き、周りの人に見てもらおうまでの約2か月間でなぜ熱中し、協力してやり遂げることができたのか、いくつかの事が考えられる。

1つ目として、保育園にお神輿が来て担ぎ手がいらないという話をしてもらった翌日からお神輿づくりの話を始めて行ったことで子どもの記憶が新鮮なうちに興味をより引き出すことができていた。

2つ目としては、それぞれにリーダーとしての役割を自分たちで決めたことによって責任感が芽生えていたのではないかと考えられる。製作期間の中で興味が薄れていく子もいたが、自分がリーダーを担当している部分の製作が始まると張り切ってやろうとする姿があった。また周りの子もリーダーの話を聞くために、これってどうすればいいかな？と質問してからやろうとしたり、神輿会議ではリーダーが積極的に話せる場面を複数回設けたことで、徐々に自分事化していき「こうしたらいいんじゃない？」という案が積極的にでてくるようになり、自分の感性を自信をもって発言することが多く見られるようになった。

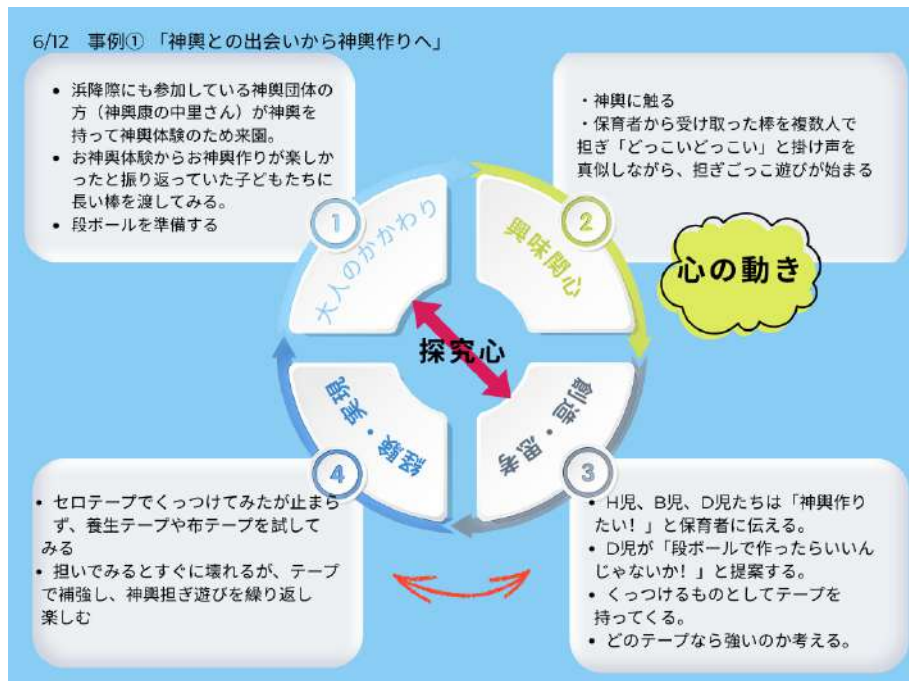
3つ目は、クラスの特徴として、耳から入る情報よりも目から入る情報の方が吸収しやすいということがあったため、会議中は紙を用意し、子どもの意見をウェブマップにしたり、絵でかけるものは極力絵で表現することで誰もがわかりやすいように配慮していた。また視覚的な情報として神輿関連の写真を保育室に貼りだしたり、パーツごとにやることリストを作成して、どんな作業が残っているかを子ども同士で話せる環境をつくったことで、疑問がどんどん湧き出て、もっと知りたい、もっと試してみたいという探究心が大きくなっていったと考えられる。それと同時に、うまくいかなかった時にも諦めずに、試行錯誤しながら

何度も挑戦する気持ちが高まっていく姿が見られた。

また、ICT や電話、スケール等のツールを活用したことですぐに情報が入りやすく、子どもたちが創造していくことを支えてくれたと考えられる。

※赤字：子どもの探究心 水色枠：大人のかかわり

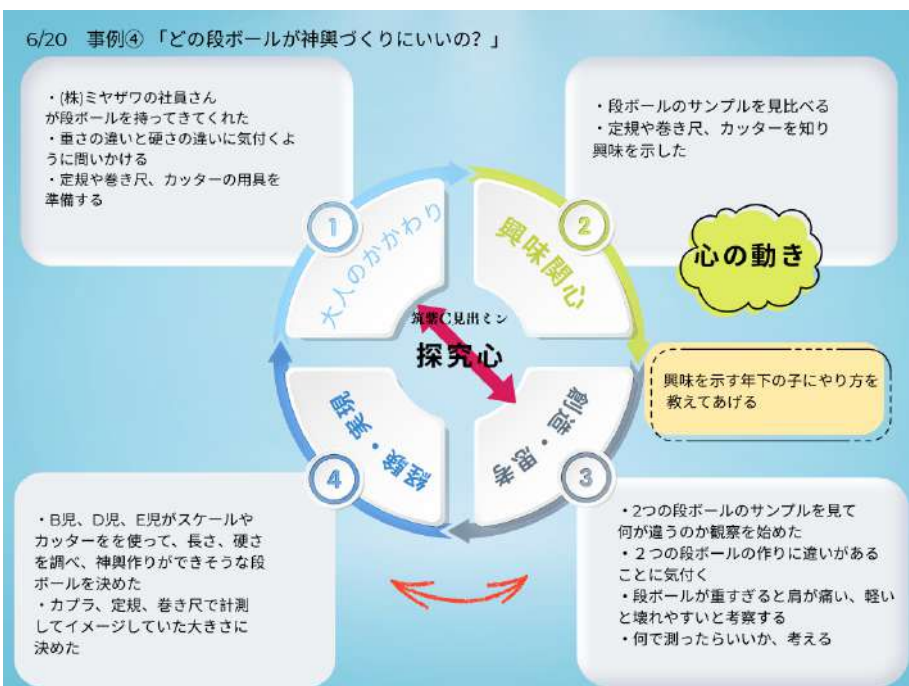
図3



子どもたちの中で物をくっつけられるものとして「テープ」のイメージが強く、それ以外の案は出なかった。しかし、様々なテープを試していくうちに、テープの中にくっつく強さに違いがあることに気が付いた。

⇒素材が豊富にあったことで試行錯誤しながら何度も検証と考察が行なわれていた。

図4



ipad が保育室に置かれるようになり、自分たちで調べることに喜びを感じながら、情報が入りやすく、子どもたちが創造したものについて明確にできた。色々な用具があることを知り、使って調べた。

⇒自分たちの力で神輿作りに必要な材料を検索していくことで、更にイメージしやすく探究心が大きくなっていった。

研究内容 ②個の興味・関心が深まっていくところから集団で行動する共同活動を通した子どもたちの気持ちの変化と行動について探る（図5事例⑥）

神輿会議という名前で話し合いの場を設けたことで、子どもたちは大人のように会議ができることにワクワクした気持ちになり、主体的に話し合いを行うようになっていったことと、グループを決めたことで友だちと行動することが多くなり、やがて楽しさに変わっていったように感じる。安心して自分が感じたことを友だちと伝え合う場が多くなったことで、友だちと一緒に創造していく楽しさを感じ、神輿作りを完成させる同じ目標に向かって、力を合せて取り組む姿が見られるようになったと考察できる。

年長組だけで役割を決めたことで自分事化でき、『神輿会議やろう』と率先して会議を行う行動につながったとを感じる。

今回の神輿作りの取り組みを通して、『やることの目標』を皆で決めて製作を行う中で、自分たちの感性を出し、創造したものに向かって力を合せることが多く見られたのではないかなと思う。

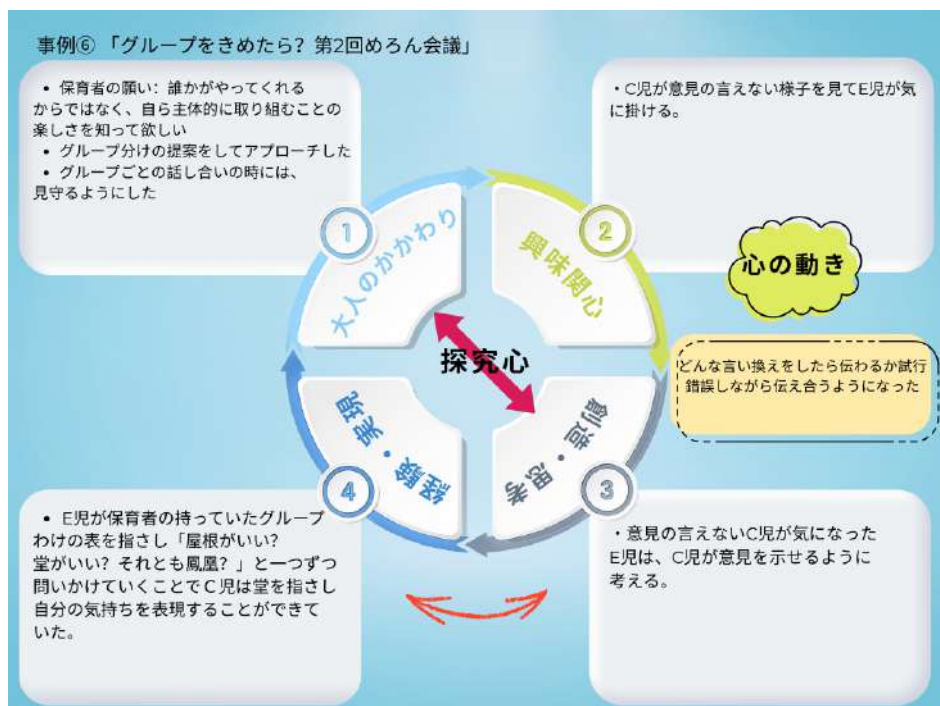
毎回活動の終わりには今日出来たこと、できなかったことを対話し、次の時にやることについて話し合って決めて、今何をしているのかを明確にしたことで、お互いの役割を知り助け合うことにつながったと考える。

また振り返りの時間を積み重ねたことで、自分だけではなく、友だちの行動についても認めて褒め合ってきたことで、助け合いながら目標に向かっていく面白さを感じられるように変化し、協働性の心も芽生えていったように思う。達成した時には喜び合うことができるようになり、取り組む前よりも他者を思いやる心の育ちが見られた。

こうした体験の積み重ねで、自信をもって自分の感性を人前で伝えたりカタチにして表現する力が伸びていったように感じる。その自信から完成したお神輿とそれを担いでいる姿を誰かにみてもらいたいという強い気持ちが芽生えて神輿担ぎまでつながったように思う。

※赤字：共同活動 紫字：協働性を感じる子どもの行動 水色枠：大人のかかわり

図5



7 事例でみえた課題と今後の方向性について

身近にある出来事は、子どもたちにとって、時に “ 未知の世界 ” となって広がり、一気に興味や関心が高まる。また実体験を繰り返し行うことで記憶となって残り、言葉やカタチで表したりする。その始まりに豊かな感性や創造が生み出されることを思うと、子どもの探究を支える大人のアプローチの重要性を改めて考える機会となった。子どもたちの身の回りで起きていることについて、言葉や視覚でわかりやすい環境を整えていくことで、自分事化できる。

今回は、園内だけではなく、地域の方々、保護者の方々の問いかけや励まし、褒められたことで支えられたように思う。

今後も子どもたちの探究心を育むために、職員とのチームワークと保護者の方々、地域の方々と一緒に楽しんで実践をしていきたい。そして今回取り組んだ中で芽生えた “ 文化・伝統継承の心 ” を育むことを継続していきたい。

【執筆者】山本 葵依 【研究代表者】飯田 映穂

【研究同人】小宮山 玲子・福田 花華